

# 概念構造について

松 倉 茂

## 1 はじめに

本稿では概念構造について考察する。

## 2 Jackendoff (1983) の概念構造 (conceptual structure)

概念構造 (conceptual structure) に関する言語学の枠組みを使った先駆的な研究で最も体系的な議論が展開されているのは Jackendoff (1983) “Semantics and Cognition” であると思われるが、その根底にある考え方は、自然言語の意味論 (semantics of natural language) を研究することは思考の性質 (nature of thought) や思考の構造 (structure of thought), すなわち人間の認知能力 (cognitive capacities) を明らかにすることに他ならない、というものである。さらに踏み込んで、Jackendoff は意味論は認知心理学 (cognitive psychology) の一部であると明言している。

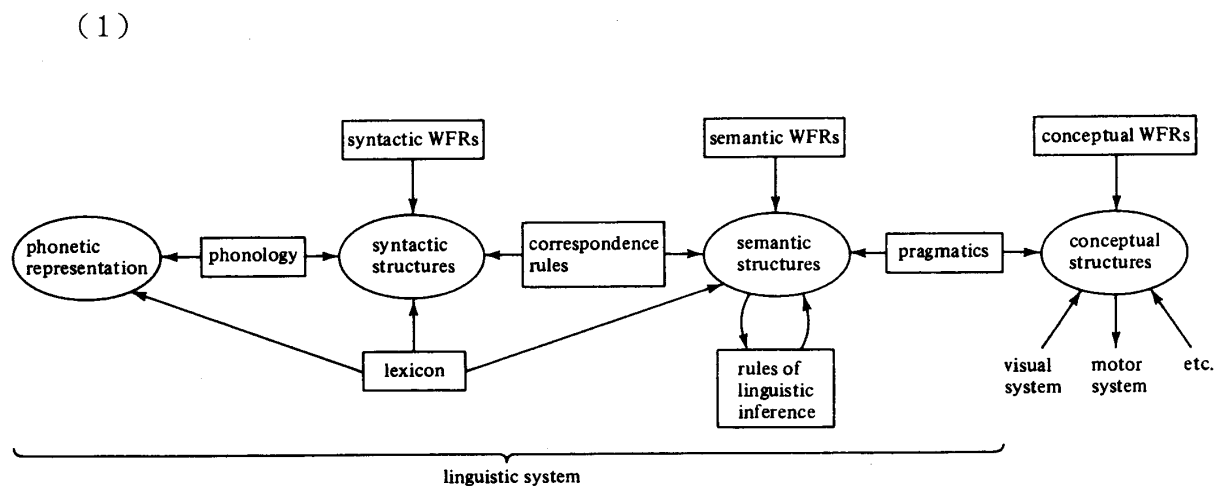
このような考え方が現在の言語学の認知科学的なアプローチの源流であることは確かであり、おそらく認知科学の一分野としての言語学という流れはますます大きくなることが予測される。それでは Jackendoff の概念構造とはどのようなものかその概略を見てみよう。

まず、Jackendoff は概念構造仮説 (Conceptual Structure Hypothesis) というものを仮定し、心の表示 (mental representation) の唯一のレベル (a single level) が概念構造であり、そこでは言語的、感覚的、運動的情報が両立している、としている。そして、概念構造は言語によって表現可能なすべての物事を取り扱うことができるほど表現力が豊かでなければならないし、また、概念構造は経験の全てのほかの様相 (modalities) の性質を取り扱うことができるほど表現力が豊かでなければならない、としている。人間によって達成することのできる可能な概念構造は、概念適格性規則の有限集合 (a finite set of conceptual well-formedness rules) によって特徴づけられる、と Jackendoff は仮定している。さらに、これらの規則は普遍的 (universal) で生得的 (innate) である — すなわち、全ての人が概念を発達させる同じ能力を本質的に備えている、がしかし、人が実際に発達させる概念はある程度経験に依存しなければならない、と Jackendoff は仮定している。例えば、子供の概念能力の発達には適格性規則、もしくは計算能力の成長に起因すると考えなければならない。このような種類の成長は骨や筋肉の成長に類似したものだと Jackendoff は言っている。Chomsky (1975) を援用し、鳥の羽も人間の指も同じ栄養素によって形成されるだろうが、どちらが実際に発達するかを決定するのはその生物の生得的な

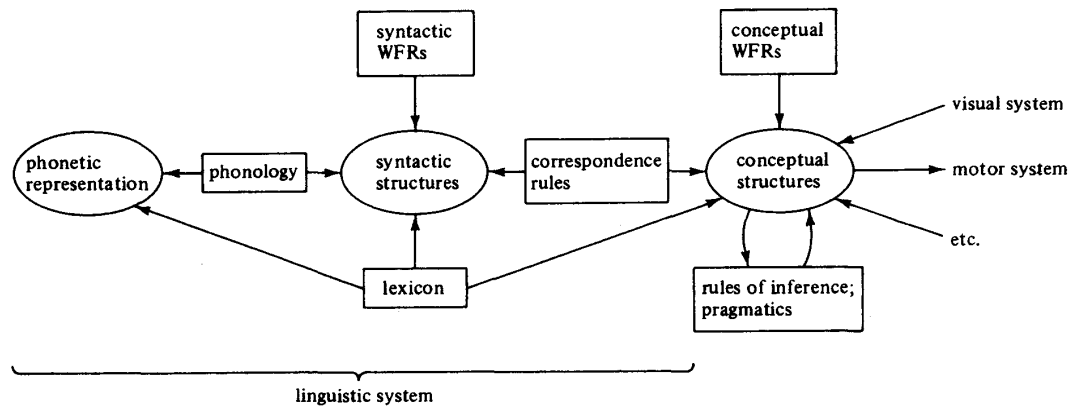
構造であり、同じことが人間の脳にも当てはまる、としている。環境によって提供される栄養や成長を刺激する運動などの入力 (inputs) は構造の諸相を制御しているとは言い難い、と言う考え方である。このような仮定が妥当なものであるかどうかについては、例えば、生まれてから一度もまったく言語に触れることなく人が言語を獲得することが可能だろうか？という問いに対する明確な答えが存在するかどうか依存しているように思われる。動物を使った実験とは異なり、人為的にそのような環境に人を置き実験データを採ることが事実上不可能であるし、またそのような人を、たとえ偶然にでも、見つけだすことは極めて困難で、不可能であると思われる。それでは、仮にもし、生まれてから死ぬまでの間に言語にまったく触れることなく成長し、言語を獲得し損なった人が一人でも見つかった場合、その時点でそれが反証となって言語能力の生得説は崩れ去ってしまうのだろうか？

言語能力が生得的であるかどうかという問題とは別に人間が言語を操る能力を解明する研究は可能であるし、特に生まれたときは言葉を話すことのできない赤ん坊が自然に言葉を習得していく過程のなかにそのような研究に対する多くの有意義なヒントが含まれていると思われる。ヒトが二足歩行によって脳が発達し、それから道具やことばを使って現在に至った進化の過程をなぞるように赤ん坊が運動機能の発達によって、這い這いをし、その後立って歩くことができるようになる。言葉の発達という観点からみると、喃語から一語文、二語文、というように次第に複雑な言語能力を発達させていく。名詞、動詞、形容詞、副詞、時間、場所、などのような根源的な概念がおそらく一番早く習得されると考えられる。そのような根源的な概念の習得においてはそれをどう定義・定式化するかはまた別の問題であるが「単純さ」(simplicity) や「複雑性」(complexity) が大きな役割を果たしていると思われるがそのような言語能力の発達の過程を体系的に研究することによって全ての人が持っていると思われる普遍的な言語を操る能力を明らかにできるはずである。

最後に Jackendoff の仮定している言語体系 (linguistic system) と認知体系 (cognitive system) の関係を表す図を以下に示すと次のようになる。



(2)



上の図の(1)では言語体系 (linguistic system) のなかに意味構造 (semantic structure) が含まれているが、(2)では言語体系 (linguistic system) から意味構造 (semantic structure) が消失し、それに取って代わった概念構造 (conceptual structure) がはみだしている。Jackendoffは(2)の方が良いとしているが、これは言語の形式的な面をできるだけ独立して研究しようとする考え方で、言語は外界との対応があって道具として機能するものであるから、その区切り方はどうであれ片方だけを研究することは片手落ちである。

### 3 おわりに

従来の言語研究は静的 (static) であったように思われるが、例えば乳幼児の言語を獲得していく過程などを見てもそれがきわめて動的 (dynamic) であるということがいえると思う。このような動的な側面は成人の言語使用にも見られるものであり、それは言語というものがそれ自身で完結した閉じた体系ではなくて、常にそれを使う人間と外界との対応があってはじめて成立するものだからであろう。

### 参考文献

Jackendoff, Ray. (1983) Semantics and Cognition. The MIT Press, Cambridge, Mass.